

震災を乗り越えた 若き牛飼いの道のり

新潟県長岡市山古志 関 克史



山古志の棚田・特産の錦鯉・伝統行事「牛の角突き」

はじめに、私が暮らす山古志の概況を説明します。

山古志は新潟県のほぼ中央に位置する山間地域で、冬は3メートル以上の積雪となる豪雪地帯です。美しい棚田に囲まれ、ニシキゴイ発祥の地としてニシキゴイの養殖が盛んに行われています。

また、国の重要無形民俗文化財の「牛の角突き」は、1000年の歴史をもつとされる伝統行事です。

平成16年10月23日17時56分
新潟県中越大震災(M6.8) 発生



私は父が始めた牛飼いを小さいころから手伝い、大学を卒業後、平成15年に後継者として就農しました。牛の管理を一通り覚えた平成16年10月23日に突然、震度7の中越大震災が発生しました。震源地に近かった山古志は道路が寸断され、孤立状態となり、山里の暮らしは一瞬にして崩壊してしまいました。



震災直後の山古志

震災発生時、私は牛舎でえさやりをしていましたが、ものすごい揺れに飛ばされ、立っていただけませんでした。



我が家の倒壊した牛舎

何とか牛舎の外に出て、後ろを振り返ると、今まで立っていた牛舎が目の前で崩れていきました。夢でも見ているのかと思いました。

中越大震災による畜産の被害

区 分		県全体	うち旧山古志村
被 害 総 額		9億5千万円	6億7千万円
家畜の 死亡・廃用	肉用牛	120頭※	115頭※
	乳用牛	15頭	9頭
	豚	62頭	—
	計	197頭	124頭

※闘牛を除く

この大震災での被害は、県全体で死傷者 5,000 名、住宅損壊 12 万棟、被害額 1 兆 6,000 億円、うち畜産の被害額は 9 億 5,000 万円となりました。とりわけ山古志では、家畜・畜舎の施設被害を合わせ 6 億 7,000 万円と、県全体の 70%を占める被害額となりました。とりわけ山古志では、家畜・畜舎の施設被害を合わせ 6 億 7,000 万円と、県全体の 70%を占める被害額となりました。



倒壊した牛舎の下敷きになっている牛

3 棟あった牛舎のうち 2 棟が倒壊し、牛が下敷きになり、73 頭いた牛のうち 30 頭がその場で息を引き取りました。

また、水田や採草地、自宅も崩壊し、一瞬にして生産基盤と生活基盤を同時に失いました。



餌を求めてさまよう牛

大震災の翌日、全村避難指示が出されたことにより、山古志を離れることを余儀なくされ、牛の世話を続けることができなくなりました。残された牛に「ごめんな」と言いながら、つないであるロープを切ってあげることが私と父にできる精いっぱいのことでした。



道路寸断のため、
ヘリコプターで輸送

その後、肉用牛を 1,200 頭ほど飼育していた大規模肥育農場が、独自に、残された牛のヘリコプターでの空輸をはじめました。やがて我が家の牛もヘリコプターで救出してもらえることになり、実際に助け出せたのは、震災発生から 1 ヶ月後のことでした。その間、野放しだった牛たちは野生化し、つかまえて集めるのは大変なことでしたが、県や農協などの職員の方々、牛飼い仲間の手助けがあって、ようやく救出にこぎつけることができました。



借上した牛舎で 救出された牛たちと経営者

残された牛は救出するまでほとんどえさを食べておらず、骨と皮だけといった体つきで、死に物狂いで生きていたのだということが一目でわかりました。

そんな中、地震直前に生まれた子牛に、母牛は身を削って乳をあげていました。本当の生きる強さを目の当たりにし、また、そのような状況にもかかわらず、1頭も流産することなく元気な子牛を産んでくれました。またここから出発できる、そんな思いにしてくれました。

救出した牛は、牛仲間や家畜商のつてを頼って、長岡市に隣接する魚沼市内の牛舎を紹介してもらうことができ、冬は片道2時間の道のりを1年間通い、世話をしました。その後、仮設住宅に近い長岡市の牛舎を紹介してもらうことができ、そこで2年間、合わせて3年間、山古志を離れて飼育しました。

地震直後はとりあえずほかの仕事をするしかないと思っていましたので、牛が飼えるということがこんなにもうれしいものなのかと実感したのを覚えています。地震から4日後、疲労により父が1ヵ月間入院したことから、牛の管理は私1人となり、実質この大震災を機に跡を継ぐ形となりました。

経営再建に向けてのスタート

旧山古志村の肉用牛農家3戸により、平成18年4月に「山古志肉用牛生産組合」を設立し、共同牛舎の建設に着手した。

共同牛舎建設事業費

（単位：千円）

事業費	交付金・補助金・助成金				山古志肉用牛生産組合負担金	
	国	新潟県	長岡市	合計		うち当該経営負担金
102,110	26,942	29,388	2,692	59,022	43,088	27,032
100%	26%	29%	3%	58%	42%	26%

- 国交付金は、「強い農業づくり交付金」
- 新潟県補助金は「中越大震災復興基金」

山古志の住民はふるさとに戻って暮らしたいとの思いが強く、これが団結力を生み出し、郷土や産業の復興について連日連夜討議して、再建に向けて取り組んできました。私も山古志で牛を飼いたいと強く望み、同じ思いをもつ2戸の農家とともに、山古志肉用牛生産組合を設立し、共同牛舎、堆肥舎を建設することとしました。

大震災で生産基盤のほか、生活基盤まで失ってしまったことから、再建のための資金をどう工面するかが悩みでしたが、国、新潟県、長岡市から補助金、助成金を受けることができ、再建のめどがついたときは、また山古志の地で牛飼いができるという実感がわき、本当にうれしかったです。

平成19年12月 共同牛舎完成

肥育牛舎

繁殖牛舎

平成19年度
強い農業づくり交付金
(畜産生産基盤育成強化)

施設名：肥育牛舎
事業主体名：山古志共同牛舎組合

工事中

そうして平成19年12月に新しい牛舎が完成し、ようやく牛たちとともに山古志に帰ることができました。また、間借りした牛舎にいたころから収容頭数の限度まで増頭を図ってきましたが、新牛舎ができたことでさらなる増頭が可能になりました。

平成20年度に中越大震災復興基金を活用し、繁殖牛・肥育素牛を導入して、飼養頭数の回復を図る。

素牛導入事業費

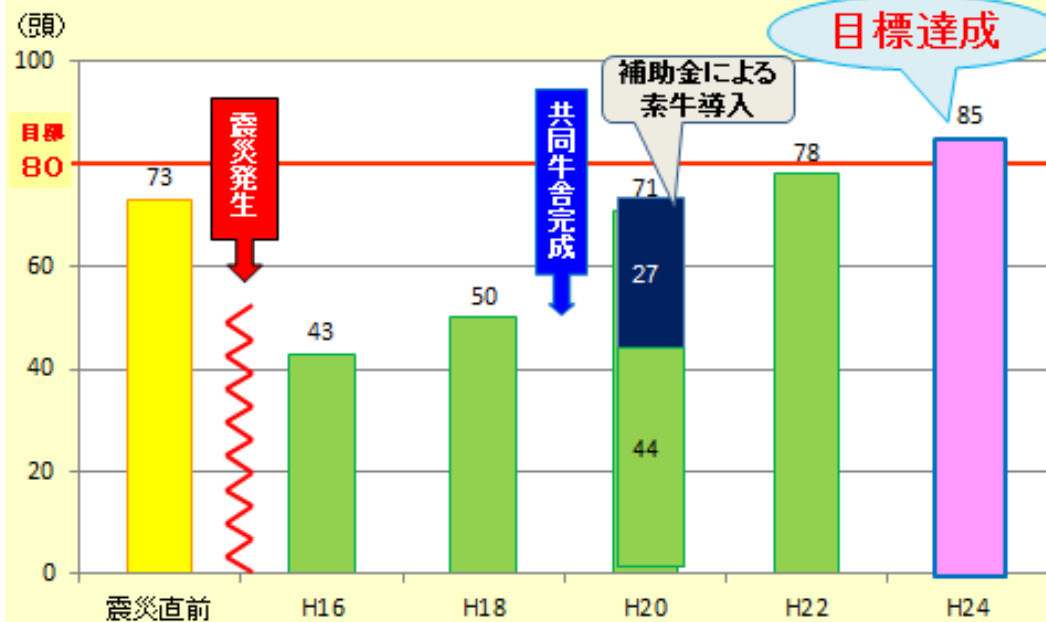
(単位:千円)

事業費	新潟県補助金	山古志肉用牛 生産組合負担金	
			うち当該経営 負担金
14,266	7,133	7,133	5,458
100%	50%	50%	30%

○ 新潟県補助金は「中越大震災復興基金」

資金の調達は、新潟県の補助金を利用することができました。

震災後の飼養頭数の推移と目標



新牛舎に移って1年後の平成20年には、失った牛の9割にわたる27頭を導入したことにより、飼養頭数は71頭と、震災前の73頭に近い頭数まで回復しました。その後もさらに増頭を進め、平成24年には震災前を上回り、目標である85頭まで規模を拡大することができました。

「日本一の牛飼い」を目指して

1 繁殖成績の向上(繁殖部門)

分娩間隔 平成23年 11.7ヵ月



目標の1年1産を達成

2 枝肉品質の向上(肥育部門)

枝肉格付4等級以上率 平成23年 100%



目標の95%以上を達成

3 売上高の向上

肥育牛出荷頭数 平成23年28頭



目標の30頭をほぼ達成

また、日本一の牛飼いを目指して、繁殖成績の向上、枝肉品質の向上、売上高の向上の3つを目標に、生産技術の改善と増頭に取り組んできました。

繁殖部門では低コストでコンスタントに自家産肥育元牛を確保するため、生産の回転率を上げることを意識して繁殖牛の管理・観察を行った結果、平成23年の分娩間隔は目標としていた1年1産を達成しました。

肥育部門では肥育期ごとの適切な飼養管理を実践し、また、牛にストレスを与えないよう、牛舎内の整理整頓、静かな環境を保つことを心がけました。その結果、震災直後では30%台で低迷していた枝肉格付4等級以上率は平成23年には100%と、経営再建当初の目標であった95%以上を達成しました。

また、計画的に増頭を進め、平成23年の出荷頭数は28頭となり、目標の30頭をほぼ達成しました。



これらの努力のかいがあって、平成 24 年度には全農にいがた肉牛枝肉共励会で最優秀賞を受賞し、日本一の牛飼いに一歩近づくことができました。

平成24年度全農にいがた肉牛枝肉共励会で最優秀賞受賞



「にいがた和牛」の
串焼きを販売
(畜産物消費イベント)

復興のシンボル 復活した「牛の角突き」



自身の経営の再建はもちろん、新潟県のブランド牛「にいがた和牛」の地産地消、消費拡大活動も行っています。現在、山古志の闘牛会場や新潟市内のフェスタ、地元の農業祭りを初め、東京で行われた新潟フェアにも参加し、山古志産のにいがた和牛の串焼きを販売しています。

一方、山古志地域の復興・活性化のための活動にも参加しています。山古志の伝統行事「牛の角突き」は、震災の影響で、一時は存続が危ぶまれましたが、現在は山古志の復興のシンボルとして復活しています。我が家も2頭の闘牛がおり、私もせことして参加しています。春から秋にかけて月2回程度、牛の角突きを開催し、県内外の多くの皆様から足を運んでいただいています。

崩壊した農地の地力増強に貢献

共同堆肥舎で
堆肥化



山古志米



かぐらなんばん

また、地震により崩壊し衰えた農地の地力増強の一端も担っています。共同牛舎から出る家畜排せつ物は共同堆肥舎で堆肥化しており、この堆肥は山古志の農家に販売され、地域ブランドの山古志米や特産品「かぐらなんばん」が育つ田畑の地力増強に寄与しています。

新潟県中越大震災から復興までの道のり

区 分	肉用牛経営	生活環境
3年 H16年10月 大震災発生 (全村避難指示) H17年 生産基盤再生期 H19年4月 避難指示解除 肉用牛経営復興期	・牛舎2棟倒壊、牛30頭死亡 ・生存牛43頭を救出 ・魚沼市の借上牛舎で飼育開始 (牛舎まで2時間) ・長岡市の借上牛舎に牛を移動 (牛舎まで10分) ・「にいがた和牛肥育名人塾」に参加 ・3戸で「山古志肉用牛生産組合」を設立 ・12月に共同牛舎・堆肥舎完成 ・繁殖牛、肥育素牛を導入 ・生産技術を向上 ・農地の地力増強のため堆肥を供給	・旧山古志村からの避難 ・父が疲労により入院(1か月間) ・仮設住宅での生活(3年間) ・10月に結婚 ・仮設闘牛場での「牛の角突き」に勢子で参加
5年 H21年 H23年 H24年	・大震災前を上回る飼養規模(81頭)達成 ・枝肉格付4等級以上率100%を達成 ・全農にいがた肉牛枝肉共励会で最優秀賞受賞	・旧山古志村に住宅新築・帰郷 ・「山古志闘牛場」が完成、闘牛2頭を飼養し勢子で参加

震災発生からここまで8年という時間がかかりました。震災により避難生活を余儀なくされ、山古志に戻るまでの3年間は、牛舎を借りてでもとにかく牛を飼い、何とか生産基盤を再生しようとの思いでやってきました。その後、山古志に戻ってからの5年間は、経営を震災前以上とするため、増頭や生産技術の向上に取り組んできました。

復興を果たすために必要なこと

1 外部からの支援

- ・ 県内外の人々からの生活物資及び精神的な支援
- ・ 行政(国、県、市)からの肉用牛経営再開への金銭的な支援

2 地域の連帯

- ・ 「故郷で再び暮らしたい」という地域の団結

3 あきらめない心

- ・ 熱い思いと強い意思による復興への取り組み

4 経営の早期安定化

- ・ 「(い)がた和牛肥育名人塾」塾生として生産技術を早期習得

災害から復興を果たすためには、まず外部からの支援が必要不可欠です。県内外の方々から生活物資を提供していただき、応援のメッセージもたくさんいただきました。

また、行政からは肉用牛経営を再開する上で必要となる資金を支援してもらい、生産基盤を建て直すことができました。

さらには、地域との連帯も重要です。山古志の住民はふるさとで再び暮らしたいと強く思い、団結して苦難を乗り越えていこうと立ち上がりました。1人では困難なことも仲間で立ち向かう団結力があったからこそ、再び山古志に戻れたのだと思います。そして、復興の原動力となるのは自分のあきらめない心です。必ず復興し、山古志で牛飼いを続けるという強い思いから、さまざまな課題に直面してもあきらめず、前に進み続けることができました。

経営再建後の早期安定化も大切です。肥育名人

と呼ばれるすぐれた技術をもつ生産者の牛舎に研修に行き、生産技術を磨きました。そして、平成 23 年には先ほど挙げたような目標を達成することができました。ここに来るまでにさまざまな課題、苦勞に直面しましたが、全国の方が応援してくれているという大きな力で前を見続けることができました。本当に感謝の一言です。

私は地震から 1 年後に結婚し、新婚生活は仮設住宅でしたが、今は 3 人の子供、両親と山古志で暮らしています。妻は茨城県出身ですが、当時家も仕事も生活もこの先どうなるのかわからないとき、少しでも力になればと送り出してくれたお父さん、お母さん、仮設住宅にお嫁に出す親の気持ちは相当なものだったと思います。そんな大きな気持ち、そして、妻が心の支えになってくれたこと。人はだれかに思われること、だれかとつながることで強くいられるのだと思います。

東日本大震災で被災された方々には、日本中が応援し、同じ思いでつながっていると思います。どうかあきらめず一歩でも前へ進んでほしいと願っています。私も復興のあかしとなるよう、日本一の牛飼いを山古志で実現したいと思います。ともに未来をみて頑張りましょう。